

8月予報（全11枚）

病防第41号
平成18年8月2日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

平成18年度発生予察情報第5号を下記のとおり発表したので、送付します。

平成18年度発生予報第5号（8月予報）

平成18年8月2日
熊 本 県

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成18年7月28日福岡管区気象台発表（単位：％）

要 素	予 報 対 象 地 域	低 い （少ない）	平年並	高 い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40

2 発生予報の概要

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
早 水 植 稲	穂いもち	やや少	並	大豆	ハスエンヨウ	並	並
	紋枯病	やや多	多	茶	炭疽病	並	やや多
	トビイロウンカ	多	やや多		チャノカメハキ	並	並
	コブノメイガ	並	並		チャハマキ	並	並
	カメムシ類	並	並		チャノホソガ	やや少	並
普通期 水 稲	葉いもち	少	並		チャノヤブミ	並	並
	紋枯病	並	やや少		チャノミドリメコバ	並	並
	トビイロウンカ	やや多	並		カザリダニ	やや少	並
	セジロウンカ	やや多	並	かんきつ	かいよう病	やや多	並
	コブノメイガ	やや多	やや多		黒点病	やや多	多

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
加ナ	ミカンダニ	やや少	並	イチゴ (育苗床)	炭疽病 (露地)	やや多	やや多
ナ シ	ハダニ類	やや多	並		炭疽病 (雨よけ)	並	並
カ キ	炭疽病	並	並				
果樹全般	果樹かみシ類	多	多	夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	やや多	やや多
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	やや多	やや多		コナガ	並	並
	灰色かび病	やや多	やや多				
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	並	夏秋 果菜類	コナガミ類 (高冷地)	やや多	やや多
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	並		コナガミ類 (平坦地)	並	やや少
	褐斑病	やや多	並		アザミウマ類	並	並
イチゴ (育苗床)	うどんこ病	並	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
					オオハコガネ	やや多	並

3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

水稻（早植）

1）穂いもち

（１）発生量：やや少

（２）根拠 ア 7月の巡回調査では、穂いもちの発病株率 4.6%(平年 10.4 %)、発病度 1.1 (平年 2.6)と平年よりやや少ない発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の穂いもちの発生は概ね平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 穂いもちは発病後の防除効果が劣るため、処理適期に防除を行う。粒剤では、出穂前の所定の使用時期に遅れないように散布する。粉剤、水和剤等では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

2）紋枯病

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 4.6%(平年 2.9 %)と平年よりやや多い発生であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率 20 %）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

3）トビイロウンカ

（１）発生量：多

（２）根拠 ア 7月の巡回調査では、0.15 頭 / 株(平年 0.02 頭)と平年より多い発生であっ

た。

イ 生産環境研究所（合志市）と天草農業研究所（天草市）における予察灯調査では、平年より多い誘殺数である。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 8月上旬に「20頭以上 / 100株」確認された場合には、幼虫発生初期に防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

4）コブノメイガ

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、株当たり巻葉数 0.1（平年 0.4）と平年よりやや少ない発生であった。

イ 天草農業研究所（天草市）における予察灯調査では、7月5日にまとまった飛来（48頭）を確認し、現在までの誘殺数は平年比やや多である。

ウ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年並である。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

5）カメムシ類

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 早植水稻周辺の休耕田等における6月の調査では、平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）における予察灯の調査では、アカスジカスミカメは平年並の誘殺数である。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は地域差があるが概ね平年並である。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。

イ 周辺より出穂が早い場合は、飛来が多くなりやすいので防除を徹底する。

ウ 常発地帯では、穂揃期とその7日～10日後の2回防除を行う。

水稻（普通期）

1）葉いもち

（1）発生量：少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株を認めず、平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 葉いもちが発生し、上位葉への進展が見られる場合は薬剤を散布する。

2）紋枯病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株を認めず、平年よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年よりやや多い。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 粒剤の処理適期は、出穂 30～10日前頃であるが、薬剤の種類によって防除適期が異なるため注意する。

イ 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率 20%）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

3）トビイロウンカ

（1）発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.01 頭 / 株(平年 0.01 頭)と平年並の発生であった。
 イ 生産環境研究所(合志市)と天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、平年より多い誘殺数である。
 ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 8月上旬に「20 頭以上 / 100 株」、または8月中旬～下旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合は、幼虫発生初期に防除を行う。
 イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

4) セジロウンカ

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、3.0 頭 / 株(平年 1.3 頭)と平年よりやや多い発生であった。
 イ 生産環境研究所(合志市)と天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、平年より多い誘殺数である。
 ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 水稻の初期生育を確保した後は、実害はほとんどない。8月中～下旬に羽化した成虫は水田から脱出するため、特に防除の必要はない。

5) コブノメイガ

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、株当たり巻葉数 0.3(平年 0.2)と平年よりやや多い発生であった。
 イ 天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、7月5日にまとまった飛来(48 頭)を確認し、現在までの誘殺数は平年比やや多である。
 ウ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は地域間差が認められるが、概ね平年並である。
 エ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 7月5日を起算日とした熊本市(アメダスデータ：7月29日現在)での次世代の発蛾最盛日は、8月2日と予想される。
 イ 発生が多いほ場では、粒剤は発蛾最盛期に、粉剤及び液剤は発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

大豆

1) ハスモンヨトウ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では発生を認めず(平年：0.1 頭 / 10 株)、平年よりやや少ない発生であった。
 イ フェロモントラップ調査においては、生産環境研究所(合志市)及びい業研究所(八代市)ともほぼ平年並の発生であった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はまだ認められない。
- (3) 対策 ア 薬剤による防除は老齢幼虫に対し効果が劣るので、白変葉を発見したら幼虫が分散する前に防除を行う。

茶

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、病葉数は 8.6 葉 / m^2 (平年 14.8 葉 / m^2)と平年よりやや少ない発生であったが、管理不十分な園では発生が目立った。
 イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。
 ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 常発地では摘採残葉の発病状況等に注意するとともに、秋芽の開葉初期に防除を行う。
- 2) チャノコカクモンハマキ
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉は認めず(平成0.7枚/㎡)、平成並の発生であった。
- イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月は平成よりやや少ない発生であった。
- ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、6月4半旬に平成よりやや多いピークがあったが、その後減少し、現在は平成並の発生となった。
- エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや少～少であった。
- (3) 対策 ア 三番茶摘採後に防除を行う。
- 3) チャハマキ
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は0.6枚/㎡(平成0.0枚/㎡)と、平成並の発生であった。
- イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、6月4半旬以降平成より多い発生であったが、7月3半旬から平成並みの発生となった。
- ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月は平成よりやや少ない発生であった。
- (3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。
- 4) チャノホソガ
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は3.5枚/㎡(平成7.8枚/㎡)で平成より少ない発生であった。
- イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月1半旬にピークが見られ、ピーク時の誘殺数は平成より多かったが、その後減少し、7月3半旬からは平成より少ない発生となった。
- ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月2半旬にピークが見られたが、誘殺数は平成より少なかった。
- エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並～やや少である。
- (3) 対策 ア 秋芽萌芽期から1～2葉期に防除を行う。
- 5) チャノキイロアザミウマ
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は2.6%(平成2.6%)と平成並の発生であった。
- イ 生産環境研究所(合志市)の黄色粘着トラップでは、平成より少ない発生であった。
- ウ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、平成より少ない発生であった。
- エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並である。
- (3) 対策 ア チャノホソガに準じて防除を行う。
- 6) チャノミドリヒメヨコバイ
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は0.5%(平成3.6%)と平成より少ない発生であった。
- イ 茶業研究所(御船町)のすくい取り調査では、平成より少ない発生であった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並～少である。
- (3) 対策 ア チャノホソガに準じて防除を行う。
- 7) カンザワハダニ
- (1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉は認められず(平成 0.7%)、平成よりやや少ない発生であった。
 イ 茶業研究所(御船町)の寄生葉率調査では、6月3～4半旬に平成より高いピークが見られたが、その後減少し、現在は平成並の発生となった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや少～少であった。
 エ 気象予報によると、8月の降水量は平成並の予想である。
- (3) 対策 ア 通常、8月下旬ごろから発生が多くなるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら防除を行う。多発した後ではどの薬剤も効果が低下するため、発生初期の防除に心がける。
 イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 8.3% (平成 3.9%)、発病果率 12.3% (平成 10.6%) で発病葉、発病果ともに平成よりやや多い発生であった。
 イ 果樹研究所(宇城市)の無防除樹の調査では、7月は春葉、果実ともに平成より少ない発生であった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比多～並である。
 エ 気象予報によると、8月の降水量は平成並の予想である。
- (3) 対策 ア 本病は夏秋梢でのミカンハモグリガ幼虫の食害痕から感染しやすく、発病すると重要な伝染源となるため、発病した夏秋梢の除去を行う。また、発病果もできるだけ除去する。
 イ 台風等強い風雨が予想されるときは、その前に抗生物質殺菌剤による防除を行う。

2) 黒点病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率 10.6% (平成 2.2%) と平成比やや多の発生(一部の多発生を含むため、やや多)であった。
 イ 果樹研究所(宇城市)の無防除樹の果実の調査では、7月は平成よりやや多の発生であった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成比やや多～少である。
 エ 気象予報によると、8月の降水量は平成並の予想である。
- (3) 対策 ア 累積降水量 200～250mm、または前回散布からの経過日数が 25～30日を目安に薬剤散布を行う。

3) ミカンハダニ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 3.6% (平成 10.4%) と平成より低く、10葉当りの頭数は 0.5頭(平成 3.6頭)と平成より少ない発生であった。
 イ 果樹研究所(宇城市)の調査では、平成より少発生であった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はやや多～並である。
 エ 気象予報によると、8月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。
- (3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率 30～40%、10葉当り 5～10頭である。
 イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、薬剤の系統を替えてのローテーション使用を行う。

ナシ

1) ハダニ類

- (1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 27.0 % (平年 3.5 %) と平年比多の発生であった。
 イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並である。
 ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 高密度になると防除効果があがらないので、雌成虫の寄生葉率が 20 % 以上、または、葉当りの虫数が 1 ~ 2 頭に達したら防除する。
 イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので注意する。

カキ

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 5月の巡回調査では、発病梢率は 0.0 % (平年 0.6 %) と平年並の発生であった。
 イ 病害虫防除員からの報告では、7月は平年並の発生である。
 ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 台風後に多発しやすいので、台風襲来前後は必ず防除する。

果樹全般 (カキ、ナシ、カンキツ類、ブドウ等)

1) 果樹カメムシ類 (チャバカメムシ、ツバカメムシ、クサカメムシ等)

- (1) 発生量：多
- (2) 根拠 ア 生産環境研究所 (合志市)、果樹研究所 (宇城市松橋) および天草農業研究所 (天草市本渡) の予察灯、フェロモントラップへの誘殺数は、平年より多く推移しており、発生数は多く、特に天草市等県南部に多い傾向にある。
 イ 7月末現在で、県南部を中心にカンキツ類、ナシ、カキ等で被害が発生している。
- (3) 対策 ア カメムシの発生は地域差が大きいので、注意を怠らず朝夕に園をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。
 イ 多発生時は、園内への連続した飛来が見られるので、合成ピレスロイド剤やクロロニコチル系剤等、残効の長い薬剤を使用する。

夏秋トマト (高冷地)

1) 葉かび病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 27.3 % (平年 9.1 %) で平年比やや多の発生であった。
 イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多 ~ 並であった。
 ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。
 イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
 ウ 被害葉や老化葉を除去し、通風、採光を図る。
 エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

2) 灰色かび病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率が高冷地の夏秋トマトで 38.3 % (平年 10.9 %) と平年比やや多の発生であった。
 イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 果実に付着した花、被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

夏秋ナス（平坦地）

1) すすかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病を認めなかった（平年の発病株率 2.3 %）。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに処分する。

ウ 薬剤防除は発生初期に行う。

夏秋キュウリ（高冷地）

1) ペト病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 41.3 %（平年 19.5 %）と一部多発生ほ場がみられたため、平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 多発すると防除が困難なので、適正防除を行い、発病したほ場では、下葉の老化葉や被害葉を除去するなどほ場衛生に努める。

イ 肥培管理を良くし肥料切れしないようにする。

2) 褐斑病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率 12.0 %（平年 6.4 %）と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 窒素質肥料の多用を避け過繁茂にならないようにする

イ 多発後の防除は困難なので、発病初期の防除に努める。

ウ 被害葉は伝染源となるため早めに処分する。

イチゴ（育苗床）

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 1.4 %（平年 4.3 %）と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 多発すると防除が困難なため初期防除を徹底し、薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。発病葉は早めに取り除き処分する。

イ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。

ウ 同系統薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

2) 炭疽病

(1) 発生量：やや多(露地) 並(雨よけ)

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、露地栽培(雨よけなし)ほ場でのみ発病が確認された。発病株率 1.1 % (平年 2.9 %) と平年並の発生であったが、7月下旬の集中豪雨により露地栽培の炭疽病発生ほ場では、炭疽病菌がほ場内でまん延した可能性がある。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や摘葉後には感染しやすいので、防除を徹底する。

イ 罹病株があると降雨やかん水により急速にまん延するので、排水に留意し、被害茎葉や被害株は速やかに処分し、伝染源を少なくする。

3) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 12.3 % (平年 1.7 %) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期の防除を徹底する。

夏秋キャベツ(高冷地)

1) 細菌性病害(黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病等)

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、黒腐病は発病株率 12.7 % (平年 3.5 %) と平年比やや多、軟腐病は発病株率 1.3 % (1.0 %) と平年並、黒斑細菌病の発生は認めなかった(平年の発病株率 0.0 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に散布を行う。

2) コナガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生株率 16.7 % (平年 20.7 %) と平年並であった。

イ 7月のフェロモントラップでの誘殺数は、阿蘇市波野で平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期の防除を徹底する。

ウ 収穫残さは発生源となるので直ちに処分する。

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多（高冷地）並（平坦地）

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、高冷地のトマトでは寄生葉率が18.3%（平成9.9%）と平成比やや多、高冷地のキュウリでは寄生葉率が18.0%（平成7.5%）と平成比やや多、平坦地のナスでは寄生葉率が8.3%（平成17.6%）と平成比やや少であった。なお、確認された種は高冷地のトマトではオンシツコナジラミが主体で、キュウリではオンシツコナジラミのみ、平坦地のナスではタバココナジラミ主体であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション散布を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率がナスで1.3%（平成2.6%）と平成並、キュウリで0.7%（平成0.8%）と平成並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

ウ **アザミウマ類はメロン黄化えそウイルスを媒介するので、キュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からアザミウマ類の防除を徹底する。**

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生株率がナスで1.3%（平成0.2%）と平成並であった。また、キャベツ、イチゴ、トマトでは発生はみられなかった（平成キャベツ1.4%、イチゴ0.2%、トマト0.1%）。

イ 7月のフェロモントラップでの誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平成比やや多、い業研究所（八代市鏡町）平成並であった。また、阿蘇市波野では平成比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、高冷地トマト、キャベツで初発が確認され発生は概ね平成並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平成並か高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、トマトでは寄生株率0.3%と発生がみられたが、ナ

ス、キャベツでは発生はみられなかった（平年ナス 0.2 %、キャベツ 1.4 %）。
イ 生産環境研究所（合志市）におけるフェロモントラップでの誘殺数は平年よりやや多く、また平年では発生が少ない 7 月 3 半旬～ 4 半旬において発生のピークが見られた。

ウ い業研究所（八代市鏡町）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年比やや少であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は概ね平年並であった。

オ 気象予報によると、8 月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

「 トマト黄化葉巻病 」 育苗期の防除対策 ！ ！

抑制栽培トマトの育苗がはじまります。トマト黄化葉巻病は育苗期に感染すると被害が大きくなりますので、育苗期から媒介虫のタバココナジラミの防除を徹底しましょう。また発病株は速やかに処分しましょう。

農薬安全使用上の留意点

ポジティブリスト制が平成 18 年 5 月 29 日に施行されました。全ての農薬、作物に残留基準値が設定され、基準値を超えたものは流通が禁止されます。薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守すること。また薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底すること。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>」上で公開しています。